第7号 1996. 8. 9	ゾーン・システム研究会々報 Photographic Society of Zone System	発行者 中島 秀雄

編集部:東京都港区西麻布4-2-10東城ビル401 ゾーン・システム研究会事務局

会員情報
any thing ok

※ 次ぎの物品を希望の方にお譲りします。

1)リンホフ カラー ４×５ 固定モノレール 程度中 価格￥１００.０００

2)２０×２４ 大全紙用国産現像バット ３枚 新品 一枚の価格￥１０００

3)ハッセルブラッド５００用 望遠レンズ 黒鏡筒 コンバーシャッター付 T-スター 新品 価格￥１８０.０００

☆ ご希望の方は、五来 瑛二 連絡下さい。

1)ホースマン ロングルーペ（６倍）新品同様 ピントフードを付けたまま開いた状態で使用出来るロングタイプです。
メーカー価格￥14,000 本人希望価格￥7,000

2)ベルVバッハ木製(ドイツ製)２段三脚 新品同様 レモン社価格￥21,000 本人希望価格￥11,000

3)露出計EURO MASTERⅡ(英国製) ウエストン マスターの復刻盤 入反射方式 レモン社価格￥26,000 本人希望価格￥16,000

☆ ご希望の方は、吉野 光治郎 迄 連絡下さい。

軽量ＵＳＡ製ホルダーのご案内
五来 瑛二

※ 登山や徒歩で撮影する者にとって、なるべく軽量で容積の少ない機材が理想ですが、ＴＲＩ-Ｘ ＦＩＬＭの製造中止に伴い、小生も従来型のホルダーを使用していましたが、何か変わるべき製品と言うことで模索していました。そこにコダックそしてフジからクイック ロード式のフィルムが販売されましたが、感度、銘柄、価格等で満足しませんでした。

アメリカのカメラ雑誌を購入しカタログを見ていますと、ＭＩＤＯ社より販売されている事を知り国内販売店を探しましたがサンプル輸入のみの段階で購入不可能の状態でした。一部の会員の方はカメラ雑誌及び用品ショーでご承知でしょうが、共同写真で一時輸入を試み中断したアメリカ製の超薄型の４×５ ８×10の二種類ホルダーが販売され ４×５を現地より各種２０枚 直接購入し、６ヶ月間使用テストを行いましたので、その結果をお知らせ致します。

一つ目は従来型の二枚撮りのカット ホルダーで材質がアルミと樹脂で加工され、厚みが不足した分、蝶番型のアダプターを使用し厚みの不足を補います。

アダプターはホルダーが複数あっても一個で間に合います。フィルム挿入口から光漏れが有りましたが手直し加工の結果、正常に使用可能になりました。ややフィルムの交換が行いにくい等の問題はありますが、平面性能は良好です。

４×５ホルダーの比較			
	従来型	ＭＩＤＯ製	価格 $
従来型の厚みの場合	１１ミリに対して	４.５ミリ	４個$５９.９５
従来型の重さの場合	１７９グラムに対して		
アダプター	１１ミリ		１個$２７.９５

※ 二つ目は、クイック ロード型の樹脂で加工された二枚撮りのホルダーで、何回でも使用可能で、好みのフィルムを選択して使用することが出来るホルダーです。そしてアダプターを使って撮影します。

現在 追加発注していますが、性能に問題があるのか、販売を見合わせている様子です。私の撮影結果では、光線漏れもありませんし、平面性はクイック ロード並みで問題ありません。

		価格$
厚み 重さ	２ミリ ４２グラム	１個 $ 6.９５
アダプターの重さ	?グラム	１個 $４５.９５

※ 購入先は、ニュヨーク各店へＦＡＸで購入が可能です。

ＡＤＯＲＡＭＡ ２１２ー８１５ー１２６０ 銀行振り込みか、現金送付

Ｂ＆Ｈ ２１２ー４４４ー５００１ クレジット カード

運賃 梱包費含め航空貨物ＵＰＳ ７日程度で￥１０.０００程

北海道撮影旅行

荒井　崇

※ 1996年6月7日(金)～10日(月)の4日間、北海道撮影旅行のきっかけは、中島先生の後輩(水上氏)が今年の春、北海道美瑛町に写真ギャラリーの喫茶店を開店したため、中島先生が招かれて企画されました。参加者は、中島先生、諸見里氏、小野氏、菅野氏、済藤氏、そして私、筆者の荒井の６名です。

中島先生及び我々の日頃の行いが良いせいか、新緑が最も美しい季節の中で４日間とも晴天に恵まれて大変充実した撮影旅行になりました。

【6月7日(金)晴れ時々薄曇り】

ＡＭ７：３０羽田発のＪＡＬに搭乗し、定刻通りＡＭ９：００千歳に到着しました。この日の集合は朝が早かったために、車で来た人、送ってもらった人が殆どでした。因に私は、前日都内のカプセルホテルに宿泊しました。

千歳空港では、マツダのワゴン「ボンゴフレンディ」1台をレンタルし、出発しました。途中で一か所、牧場を撮影した後、国道274号を走り第一の目的地である竜仙峡に到着、まずコンビニで調達した おにぎりやパンで昼食をとり、撮影を開始しました。この渓谷には、多数の岩溝を流れて落ちて行く千鳥ヶ滝や、古い煉瓦造りの発電所など、格好の被写体があり、各自真剣にカメラのセッティングをしていました。

その後、国道237号を北上し、途中の白樺林を撮影しながら、占冠村(シムカップ村)の赤岩巌峡に着きました。ここはその名の通り赤色の岩が川沿いに群がる渓谷で、人里離れた寂しい場所に在って、独特の様相を呈しておりました。

この場所での撮影が終了した頃、ちょうど日が暮れて来たので、今日の宿泊地である上富良野町へと車を走らせました。この日を含めて２日間宿泊した場所は、「ホップス トーアス ホテル」と言う上富良野町の東側丘の上に建っている比較的新しいホテルです。

大変眺めが良く上富良野の丘陵地帯と大雪山連峰が一望に見渡せたのが印象的でした。夕食を済ませた後、中島先生の後輩である水上さんがホテルにやって来ました。水上さんは、中島先生が細江英公先生のアシスタントをしていた時の後輩で、その後アメリカに渡り、しばらくコマーシャル関係の仕事を行っていたそうです。海外の生活が長かったと言う印象はあまり無く、どちらかと言うと、「地元に根付いた人」といった感じの方でした。

この後、毎晩寝る前にやらねばならない仕事があります。言うまでもありませんシートフィルムの詰め替え作業です。特に４×５の初心者である私にとって、眠い目を擦りながらチェンジバックに手を突っ込むのは、いささか辛い仕事でした。考えてみると、中島先生と諸見里さんは８×１０、済藤さんは５×７、菅野さん、小野さん、そして私(荒井)は４×５で全員がシートフィルムのカメラ、しかもモノクロ。富良野、美瑛近辺で、こんな撮影グループは他に前例がないかもしれません。

【6月8日(土)晴れ】

ＡＭ４：３０ホテルを出発し、まず深山峠と言う美瑛の丘陵地帯を展望できるスポットで、水上さんと待ち合わせして見晴らしの良い美瑛の丘の上にある「ＷＩＴＨ　ＹＯＵ」と言う有名なペンションの近くで、眼下に望む水田を、「ふれあい牧場」と呼ばれる塔の形をした屋根が点在する牧場で羊の群を撮影しました。

一旦ホテルへ戻って朝食を取り休憩した後、再び美瑛に出掛けました。日新ダムの近くを走行していた時、中島先生が不意に、「これだ！ここがいい！」と言って運転していた諸見里さんに車を止めさせたのです。そこには林に囲まれた細長い畑があり、作物保温用に掛けられた白く細いビニールの線が、美しくうねっていたのです。しかも奥には大雪山連峰がしっかりと顔を覗かせている雄大な風景。しばらく全員が夢中になってシャッターを切っていました。

この日の昼食は、水上さんの経営する写真ギャラリーの喫茶店「Kitsch'n Kikchen」で食事を取ることにしました。店内の写真は、水上さんが以前、ＪＡＬジェットストリームのＣＤジャケット用に仕事で撮影した時のものです。海外のスナップ写真が主で、自作のソフト色フィルターを用いた独特のムード写真でした。ここで皆が食べたメニューは、「チキン＆トマトアサリ」と言うカレーで、何とライスを挟んで片側にチキンカレー、もう片側にトマトアサリカレーが盛り付けてある言わば２色カレーです。

味は、独特のコクがあり、大好評でした。昼食後は再び水上さんの案内で、美瑛の有名な撮影スポットを、一通り回りました。撮影スポットには、それぞれ名前がついており、「ケンとメリーの木」「セブンスターの木」「親子の木」「マイルドセブンの木」等、いずれもコマーシャル関係に使用されたスポットだそうです。

途中、古いサイロのある牧場農家の家を撮影させてもらったり、広大な畑の中の白樺を撮影しながら水沢ダムと呼ばれる新緑に囲まれた美しい湖に到着しました。ここは前田真三の写真で有名な大雪山連峰の映った写真を撮ることは出来ませんでした。

撮影を終えて、再び上富良野の「ホップス・トーアスホテル」へ戻ったのは、ＰＭ８：００頃でした。

【6月9日(日)晴れ】

この日は、何としても日の出直後に撮影したいと意気込んで、水上さんも含めＡＭ４:00に美瑛に向けて出発しました。まず、深山峠を過ぎた国道沿いで、左手に美しい霧を発見しました。霧が消えない内にと皆で急いでカメラをセッティングし、何とか霧を捕らえることが出来たようです。撮影が始まると霧は消え去りました。

次に、前日行った水沢ダムを再度チャレンジしました。しかしながら今度は遠景が霞んでしまって大雪山連峰がはっきりしませんでした。とりあえず湖畔の風景を撮影した後、近くのステンレス製サイロのある農家、「三愛の丘展望公園」と呼ばれる見晴の良い丘 等を撮影して、朝食を取るために一旦ホテルに戻りました。

朝食、休憩後、今度は富良野に向かいました。この日は美瑛町でヘルシーマラソン大会が開催されると聞いていたので、大会の開催される日中の時間帯は、あえて美瑛を避けることにしたのです。とりあえずの目的地は、「五郎の石の家」と呼ばれる石造りの山小屋で、ＴＢＳのドラマ「北の国から」のロケ用に建てられた家です。途中、古い木造りの東大研修所を撮影しながら、正午近くに「五郎の石の家」へ到着。そこには、新緑に囲まれた美しい草原の中に、円錐状の煙突が付いたユニークな形の石造りの山小屋がポツンと建っていました。しかし、そこには３０ｍ位離れた場所に柵で囲まれたカメラセッティング用の台があり、そこでしか見ることが出来ないことに気付きました。近づいて撮影したかったモチーフなので我々は大変がっかりしました。

不本意ながらも一応「五郎の石の家」を撮影し、途中一か所きれいな丘陵地帯を撮影し、富良野市街地へ戻って昼食を済ませた後、再び美瑛へ向かいました。次ぎの目的は美瑛、富良野の写真で有名になった前田信三のギャラリー「拓真館」の鑑賞です。

ＰＭ４:00頃「拓真館」に着くと、この空いている時期だと言うのに、観光客でいっぱいでした。前田さんの作品を見ると、我々が、これまで撮影して来たスポットが随所に見られ、大変参考になりました。前田さんの作品は、今や世の中に溢れており、又、彼を踏襲した作品があまりにも多いため、残念ながら私は新鮮さをあまり感じませんでした。一方で、この様な素晴らしい被写体を最初に見いだした≪写真家としての眼力≫と言う面で、私の尊敬する写真家の一人となっています。私は、以前から欲しいと思っていた前田さんの写真があったので、撮影旅行に出掛ける前にオリジナルプリントを注文して置き拓真館の売店で、そのプリントを見せて頂いたところ、残念なことに作者のサインは印刷、また写真集に載せられた時と、トリミングの構図が全く異なる、といったひどいものでした。サインが直筆で、トリミングが正規のものは、聞いていた値段(３万円)の２倍以上もすることが分かり、とりあえず3万円は出す価値が無いと判断し、４っ切りに変更してもらって、２万円で購入しました。

「拓真館」を出た所で、たまたま水上さんに会いました。息子さんと奥さんもいらしたので、一緒に記念写真を撮って「拓真館」を後にしました。水上さんは、息子さんに撮影現場を見せたいとおっしゃったので、昨日も行った広大な畑の中にある白樺が撮れる撮影スポットへ一緒に行きました。この日は昨日と異なり雲が奇麗で光線も良く絶好の状況でした。水上さんの息子さんもさぞかし感動したことと思います。水上さんは、「息子にも写真をやってほしいと思っている。」と中島先生に話したそうです。そうなれば良いと感じたのは、私だけではなかったのではないでしょうか。

撮影が終わると、今日の宿泊地である「パークヒルバレーホテル」に向かいました。スキー場の近くに有るりっぱなホテルで、豪華な食事と露天風呂を楽しむことが出来、皆十分に体を休めることが出来たようです。そして水上さんの計らいで割引をして頂いた為、安く宿泊することが出来ました。(何と5000円引きでした)この日の夜は、水上さんが遊びに来て、写真談義に花を咲かせました。

水上さんは、しきりにゾーン・システムにＴＲＹしたいと言っておりました。これまでモノクロ機材を揃える場所が無かったため作品の殆どはカラーだったそうで、美瑛に戻ったのを機会にモノクロでの作品造りを、今後行っていきたいとのことでした。中島先生が、なんとか通信教育でゾーン・システムが出来るよう検討してみることとか、そして菅野さんの不要になった引き伸ばし機を差し上げることになりました。又、参加者全員の連絡先を伝えて何か我々が力になれることがあれば協力する約束をしました。

【6月10日(月)晴れ】

いよいよ最終日です。相変わらず天気は快晴で、近くの大雪山連峰もくっきりと見えています。朝は５時に出発して、近くに流れる美瑛川、朝日に輝く山肌、大雪山を望む牧場を撮影した後、朝食を済ませてホテルを後にしました。

この日は時間があまり無かったので、とりあえずホテルの近くの、大雪山登山入り口付近へ行ってみました。たまたま５月の寒波で降った雪が足下に残っており、大雪山連峰に残る美しい雪のパターンとのマッチングは最高のモチーフでした。

撮影後、日新ダムと呼ばれる山奥のダム付近で、水没しかけた草木を撮影しました。この場所は、一度２日目 に通り過ぎた場所でしたが、風が強かった為あきらめた撮影地でした。水面から覗く草木の様相は神秘的で、「沖縄のマングローブのようだ」と中島先生は、おっしゃっていました。この日、風は無かったのですが、前方にじゃまな木があった為、みんな悪戦苦闘しているようでした。

昼食は、また水上さんのギャラリー喫茶店でお世話になりました。今日は水上さんお薦めの冷たいスパゲティーと、サービスのケーキやマフィンを頂き、大変ボリュームのある昼食になりました。ここで、写真を売ったらどうか、と言う話しになり、とりあえず水上さんの写真を気に入った人は、彼のプリントを注文し、送ってもらうことにしました。我々は、この素晴らしいギャラリーが何時でも美瑛に残ることを願いながら、千歳空港へ向けて美瑛町を後にしました。帰りは高速道路を使ったので、予定よりも1時間以上早く空港に到着、おかげで空席があり1時間前の便に乗れ、予定より1時間早く羽田に到着しました。

今回の撮影旅行を通じて感じたことは、中島先生が真剣に被写体を見る姿勢です。車の中から素早く良いモチーフ、良い光線状態を選別して行くその目は、学べき点が多分にあったような気がします。

最後に、中島先生の後輩であり、今回お世話になった水上さんの連絡先を記します。美瑛町、富良野近辺に出掛けた時は、是非立ち寄って見て下さい。

水上 英之 氏

ギャラリー喫茶店「Ｋｉｔｓｃｈ'ｎ　Ｋｉｋｃｈｅｎ」

写真ギャラリー“拓真館”を訪ねる

中島 秀雄

※ 北海道撮影会の一つでもあった、前田真三の写真ギャラリー“拓真館”を訪ねました。年間４０万人もの観光客が来るというこの地は、北海道のほぼ中央に位置し、周りは丘に面した畑が延々と続き、外にこれといって見る所が何も無い場所です。

我々は一旦、丘に上がり案内標識に従って進みました。標識が至るところで目につき、ギャラリーが近いことを意識させはするがいっこうに見えてこない、丘を下り谷に沿ってしばらく進み、再び丘に登り、下る間際に突然こんもりとした白樺の林が見えました。

新緑の隙間から塔のある白い建物が見え、人影も見えました。一目で拓真館だと分かりました。ここは丁度 窪地になっていて丘から行くにしても、谷筋から行くにしても、前田真三の写真と同じ風景を眺めながら行くことになります。

この日は日曜日ということもあって、観光バスを連ねた人々で混み合っていました。廃校を利用したというより教会のように見え、隣の建物が神父の自宅といった印象でした。１９７１年 前田真三は初めてこの美瑛を訪れた時、ヨーロッパの風景をイメージしたと言っています。その時のイメージをそのままこの拓真館に当てはめたことが想像出来ます。

前田真三は１９２２年八王子に生まれ、１２歳の頃から既に絵を得意とし、各種のコンクールに応募したといっています。その頃から兄の写真の手伝いをするようになり、現像、焼きつけ等を手掛け、ベビーパールを買ってもらったのがきっかけで写真に入っていったようです。また野鳥観察や山歩きが好きで、山岳、森林、渓流などを好んで撮影し、２２才の時にリンホフ・スーパー・テヒニカ４×５を購入し本格的に写真に傾倒して行きました。そして１９６７年、写真リース会社“丹渓”を設立、その代表になり、長年勤めていた会社を辞めて、フリーの写真家として活動するようになって行きます。“丹渓”とは南アルプスにある“丹渓山荘”から名前を取っています。それ以来出版、広告、企業のポスター、カレンダー等で活躍し、１９７７年にカレンダー展で大蔵省印刷局長賞受賞、１９８０年には内閣総理大臣賞を受賞。写真集として、ふるさとの季節、日本の彩、春夏秋冬、北海道大地の詩、上高地、一木一草など多数。

１９７１年７月１２日、美瑛の丘の美しさに魅せられて写真を撮っていたとき、地元の人から注意を受け、それが一つのきっかけになって拓真館の構想に進んでいったようです。当時この地はゴルフ場開発の問題が持ち上っていて、地元の人々は神経質になっていたようです。“許可無く測量などしないでほしい”前田真三が三脚を立てて写真を撮っていれば、遠くから見ると測量士のように見えたのも無理はないでしょう。“いいえ、写真を撮らせてもらっているんです”。丁度この年に拓進の小学校が廃校になりました。

そして１９８７年に美瑛町の協力のもと“拓真館”がオープンすることになります。

混雑する入口でスリッパに履き替えるのに少し抵抗を感じましたが、ギャラリーと言うより教室に入るような気分です。入口には、ここへ来る途中 見えた美瑛の丘を象徴する写真で我々を迎えて来れます。金色に輝く麦畑と緑の牧草が波のうねりのように延々と続く風景写真で、紛れもなく来る途中で見た美瑛の丘でありながら、この写真の様に見えなかったことに我々は少しの戸惑いと大きな感動を得ます。少し入った左のコーナーには厳密にカラープリントされた前田真三の代表的な作品の展示コーナーになっていて、カラー写真に拘ってきた作者の心意気が十分感じ取れます。

赤く輝く美瑛の丘や冬の風景、霧が立ち込める新緑の林、四っ切り程にプリントされ額装されたこれらの写真は他のコーナーのプリントに比べて色に深みが感じられ、正確にプリントされた様子が見て取れます。

カラープリントの美しさを十分官能させてくれました。厳密なカラープリントという意味は、作者がいなかったので正確なことは言えませんが、三色分解してプリントしたと会場で聞きました。

カラー写真の基礎を少し考えてみましょう。色再現には、加色法の青、緑、赤の色光の混色と減色法のイエロー、マゼンダ、シアンの色材混合の二つの色再現方法があります。カラー写真は減色法を使って撮影し、プリントでは減色法の基本の三色Ｙ．Ｍ．Ｃのフィルターを色補正として使って、一回の露光で済ませます。

カラー印画紙の中にＹＭＣの三層があって、そこで三色分解してくれるからです。それでは加色法の基本の三色を使ってカラープリント出来ないでしょうか、出来ます。ただしフィルターを三回交換しながら三回露光するのです。つまり三層に対して一層づつ露光していくのです。もし途中でネガが動いてしまったら色がずれてプリントされてしまいます。このやり方の特長はなんといっても色抜けの良いカラープリントが期待できることです。もしチバクロームであれば長期保存にも最適です。この時に使うフィルターは三色分解用のフィルターで、ラッテン４７Ｂ、５８Ｇ、２５Ｒで、この三枚のフィルターを一回づつ取り替えながら三回露光するわけです。ずいぶん手間のかかるプリンティングのように思えます。しかし白黒のプリントを自分でやる我々は，焼き込みなどで三回位の露光は年中やっている分けで、あまり驚くことはありません。ただ普通のカラーラボではやらない方法です。又は、オリジナル原稿を三色分解撮影して二枚の白黒ネガを作り、三色分解フィルターを使って前に述べたように、プリントしたのかもしれません。つまり正確に三色分解してプリントしたことになります。

このやり方の特徴はカラーのオリジナル写真が変色したり、なくなってしまっても白黒のネガにしておけば、長期保存が効くと言うことにあります。中央の展示室は天井が高く以前は講堂だったことがうかがえます。

太い木の梁と格子のある窓は新建材に替えられていますが、全国どこの学校も以前はこのような校舎だった時期があり、懐かしく思います。 ここは写真集、ビデオ、ポスターの展示販売、そしてキャビネから四っ切りの大きさまで、タイプＣのカラープリントが額付きで販売されています。しばらく観光客の様子を見ていましたが、写真集は開いて見て行くものの買うまでにはいかず、結局ポストカードに落ち着くようです。土産に本を買う習慣は日本人には無いのかもしれません、それとも人が買うポストカードを私

も買う程度のことかもしれないなどと余計な雑感です。またここには代表的な作品で、空が炎で燃えるような夕焼けの美馬牛小学校と、真っ赤に色づく美瑛の丘が全倍程にプリントされ我々を引き付けました。

何故この丘だけこんなに赤くなるのか、後処理で色を付けたのではないか、どのように。ムンクの叫びのような夕焼けのゆらぎ。

前田真三の写真の特徴は、点在し拡散する風景を超望遠レンズで引っ張り、寄せ集め、まとめていく、そして風景写真の手続きにしたがって近景の量感、中景の絵作り、遠景の雲や光の処理に独特の切り口で仕上げて行くところにあるように思います。

以前彼は、日本には広大とか雄大というにふさわしい風景は存在しないといっていました。そうであればこそ長玉で風景を寄せ集めスケール感を出す必要があったのでしょう。また風景写真は目で見るもので、頭で考えて撮るものではない。大きな心で真正面からこれに対峙し、その奥にかくれている無限の美しさを力強く、格調高く表現することにある、と言っています。

これまで様々な写真を撮って来た中で、この美瑛の写真には大地の美しさというか光の美しさを強く感じ、今までの日本の風景写真にはなかったカラーによる風景写真の一つのスタイルを築いたと僕には感じられるのです。

巨大な自然も、荒々しい自然も、非常な自然もない、箱庭のように表現するしか無かった日本の自然の中から、北海道しかもここ美瑛にたどり着いたことは、前田真三にとって必然の帰結であり、ここに所を構えギャラリーまで作り上げたことは、自身の中にある写真に対する並々ならぬ情熱の証なのだ、と感じました。

このことは外ならぬアダムスが、サンフランシスコからヨセミテの美しさに動かされ、所をヨセミテ渓谷に移して、美しい被写体の中に移り住んでしまったことに通じるところがあり、なんともうらやましいことと思いました。

本来すべての人々にとって住むべき場所、その人にふさわしい定住の場があるのかもしれません。とりわけ風景を題材にしている写真家にはそう言えるのではないでしょうか。いったいその地は何処なのだろうと考えて見るのも面白いものです。"写真を撮り続けることで見えて来るのだ"と美瑛の夕焼けを見ながら思いました。

美馬牛、美景農園、美進小学校、美田小学校、美夢舎、美沢小学校、美郷不動尊、美沢一区、美園、美田橋、西美小学校、福美沢、美瑛橋、美沢橋

中島 秀雄

ゾーン・システムとは!

☆ ゾーン・システムの意味を、まだ良く理解されていない方の為と、そして正しく理解して頂く為に今号と次号ではアンセル・アダムスの写真術の序文を取り上げることにしました。

巷では、ゾーン・システム研究会をアンセル・アダムスの宗教のように受けている方も多いようですが、それはとても大きな間違いです、ある意味のゾーン・システムは、感覚で行って来た事をアンセル・アダムスが長年の経験と実績で一つのシステムを確立し、その方法を私達が一つの手段として勉強していることです。

切っ掛けは、中島先生がアメリカでゾーン・システムのワークショップを受けられ、その方法に感銘を受けた先生が、ある時、川崎市民ミュージアムで学芸員を行っていた平木収先生にグレードアップ フォトグラフィの講座を行うお話しがあったところから、ある意味ではゾーン・システム研究会の始まりとも言えるでしょう。

ある意味では、宗教と呼ばれる位、一生懸命に行わなければならないのかとも感じます。そして何を行 っても皆さん一人一人の感性が必要と言うことになります。

※ この本は、教科書として発行されたもので、1巻がザ・カメラ 2巻がザ・ネガティブ 3巻がザ・プリントの構成になっております。
著者:アンセル・アダムス 訳者:梅沢篤之介 発行者:佐藤文夫 発行所:岩崎美術者

【アンセル・アダムスの写真術から序文より】

本書は、私の新技術叢書(そうしょ)、(叢(そう)は多く集めたものの意味)『新アンセル・アダムス写真叢書』の第1巻である。さきに出版された『基礎写真叢書』の概念を深め、整理して現在の機材や工程に関する最新情報を収集した。しかし、写真材料の現状について述べることより更に重要なことは、写真に対する個人の取り組みである。想定の概念が本書と、この叢書全巻の根底になっている。画像(全体あるいは部分的)の想定は、露出に先だってその画像を心の中に鮮明に見ること、すなわち、画像の構成から最終プリントに至るまでの連続的な投影である。

想定は独断的な見解より、むしろ写真に対する姿勢と見るのがより正確であろう。写真家は完全な表現の自由をもっており、決して私や、誰か外の人の芸術上の思想によって、規制されるべきでないことは当然である。 私の意図は読者の創造的な表現に役立つ機材と心構えの習得を助けることであって、創造性そのものを押し付けるつもりはない。

芸術そのものは自明であり、言葉で表現できない思想や感情をつくりだす。ある本質を除けば、芸術作品のすべての特質を定義することができるように思われる。

この叢書で私は、技術の重要性と写真の創造性との関係を、それとなく述べようと思う。創造性そのものについて、それが存在すること、言いかえれば、あらゆる時代、あらゆる媒体を通して、創造性をもつ作品を参照することによってのみ証明できる不思議な可能

性があることを主張できるだけである。誰もが皆、創造性と呼ばれるこのつかみどころのない特性を、ある程度もっているとすれば、写真は、その表現の手段として先例がない。

にもかかわらず、写真の安直さと取り扱いの容易さが、ときに自滅的(意図に反する)結果を招くことがあるように思われる。機材や手順の多くの限りない自動化によって、慎重な応用はときには隠されてしまうこともある。

私が写真家に望むことは、この媒体を自由にあやつること、最新の機材や科学技術を創造的な目標を達成するために、自身で解決しうる力を犠牲にせず、どのようなものでも、使用することである。機材を手に入れ“公式”に従うことが、目標を確実に達成させるという感じが強い。エドワード・ウェストンの構図は、見ることの最も優れた方法である。という権威ある言葉は、想定の意味を明解にし、いかなる公式も技巧に勝るという概念を無用なものとするはずである。

この叢書で公式を示すことは、私の意図ではなく、学生が能力を高めるために役立つ指針を述べるつもりである。私が例として上げた作品の様式を学ぼうとすることも、読者にとっては同じ様に無意味なことである。私の作品は“写真のあるべき姿”ではなく、私そのものを表している。写真の可能性について読者が理解しようと努め、また、もし適切に育てば必然的にそうなるように、自らの様式や創造性が自ずから現れるように努めることが、とくに重要である。

しかし、写真は部分的には言語であるといえよう。そして、写真家は対話を越える才能や願望をもってはいけない。スナップ撮影を好む人は、撮影の全てを自動操作に任せることができるが、彼が作品から受ける楽しみについて弁解する必要はない。

他方、アマチュア(文字どうりの意味で、写真を愛する人)は、重ねた努力に比例して、多くの解釈や能力を身につけるようになるであろう。まじめなプロ作家、あるいは創造的な写真家は、鋭敏な目や反応と同様に、最大限の技術と想像力が必要である。

多くの人達は、彼らをとりまく世界の観察から始まって、知覚のより深いレベル、より大きなかかわり合いへと進み、いくつかの段階をへて上達していく。もし私が、この叢書を通して、読者が更に厳しく見、作品に自身を投影できるよう手助けができれば、非常に喜ばしく思う。

私自身の写真とのかかわり合いは、かなり複雑な道をたどった。私は、ピアニストになるべく教育を受けたが、60年程前、最初の本格的なカメラ(コダック スピードグラフィックの$1\frac{1}{4}\times4\frac{1}{4}$インチ ロールフィルム カメラ)を裕福な従兄から贈られた。専門的に写真の道に入ったとき、それは1930年頃であったが、音楽教育によって、私の中に染み込んだ、厳しい訓練が新しい仕事に引き継がれたことを知った。音楽教師から受けた秀でることへの執念がなかったとしたら、私の写真がどのようになっていたかは想像しがたい。

1931年から1932年にかけて、同じ信念をもつ友人達と共に、私は「f/64」というグループの設立に参加した。これは、当時流行していた、軽薄なサロン風な作品と闘うことを意図した“正統”写真の視覚集団であった。親友であり、私の後援者でもあった、サンフランシスコのアルバート・ベンダー、加えて、私の父は私の作品の鑑賞者や職業に対する責任感を私にたたき込んだ。“伝える”という原理は、かなり社会的意識を反映していた。 私は、執筆、教えること、専門的な活動などを通して学んだことを、伝えることに強い義務感をもった。私は幾つかの批判的なぎこちない記事を書き、非現実的な試合で世界を相手に闘い、厳密な様式や技術の完成度に対して、ほとんど狂信的な態度をとるようになった。

私は、雑誌『イングリッシュ モダーン フォトグラフィー』に記事を書くように求められ、ついでにその出版社からの依頼で『写真制作法』と題した技法叢書の1冊を出すことになった。その当時(1935年)としては、素晴らしい活版印刷による複製が折り込まれ、私の初期の技術が、うまく紹介されていたことにもよるが、この本はかなり好評で、私も含めて多くの人が驚いてしまった。

数年ののち、ロサンゼルスのアートセンター・スクールで教えているときに、私はゾーン・システムを展開させた。私はロサンゼルスとヨセミテ渓谷で指導したワークショップでの教育的活動に刺激され、1945年『基本写真叢書』として知られる5冊の書物の執筆を始めた。友人と仲間達は写真制作に加えて著作、教育、その他の活動に何年も費やしたことをいぶかった。

私は、このような仕事があったからこそ、世間と接触を保つことができたと思っている。私には制作だけに命を捧げる神殿のなかで生きることはできない。私は、また、写真が抱えているさまざまな課題の“ナットとボルト”となる多くの仕事に着手した。

“唯物論的なつまらないこと”が、写真家の繊細な知覚作用を損ねていると考えるとぞっとする人もいる。しかし、私は正直にいって、仕事の性質にもよるが、想像力がどの程度であれ、これらの仕事から実際的な技術のみならず、その応用の方法など、多くのことを学んだと思っている。そこで、この新叢書の執筆も含めて、写真制作以外の活動でもそうであるが、写真に依存しつつ、それらのいずれもが写真に寄与している。

本書は、1970年に、部分的な改訂版が出版されたが、『基本写真叢書』第1巻の全面改訂版である。ほかの巻についても、全面訂版を現在準備中である。旧叢書に親しんだ読者は、いくつかの点で相違していると思うかもしれないが、本書は技術と創造性という共通の原理に基づいている。本書の準備に当たっては、はじめて、専任編集協力者ロバート・ベッカーと親しく作業を続けたが、この仕事に対する彼の多くの有益な助力は称賛にあたいする。

この叢書では内容の構成を変更している。すなわち、この第1巻は、幾つかのカメラや機材、イメージ管理がついて章と節を増補しているが、旧叢書の第1巻に含まれていた暗室の項目は、新叢書では第3巻にいれるつもりである。本書の改められた構成では、ここ数年の新しい発展と、機材、手順と現代写真の概念が新に加えられ、これらを十分に説明するための、二つの理由から本文を全面的に書き改めた。

☆ この続きは次号のＮｏ８で引き続き紹介します。